

# 宗祇の連歌観について

——「老のすさみ」の評語を中心に——

光 本 光 徳

「老のすさみ」は文明十一年（一四七九）越前国一乗谷において朝倉弾正あてに書かれたものである。従来、宗祇の連歌史上の位置づけについては、中世連歌芸術の最高の完成者として許容されている。しかし、彼の連歌論については従来のそれを総合的に集めた点は容認されていても、良基や心敬と比較してみてもあまり独創的な理論体系は残していないというのが現在の一般的な評価である。

宗祇の「老のすさみ」はやはりその意味で緻密な連歌論書ではなく、先人の具体的な作品の、実作者としての適確な鑑賞をとおして、宗祇の庶幾する連歌美を宣揚したものであり、また連歌道の正風（正道・正路・正理）の自覚と確立のもとに実作指導を試みたものである。そこにはより知識的学問的態度が見られると解するより、深遠な連歌世界を探索し、文学的真実の探求によって実作指導を試みようとしていると理解した方がよいと思う。

宗祇は「これ偏によはひの末のなぐさめなれば、なづけて老のすさみやいふべからむ」と、この書名のいわれを述べながら、反面正道より脱落して邪路に進むことを厳しく戒め、「詮とする所、こ

のみちは心ざしをてにかけ、あしに実地をふむできざはしを登ごとく稽古すべき物なり」と、稽古な稽古修行の必要を述べているのも、宗祇自身着実な実作と学究をとおして宗祇の庶幾する連歌世界を樹立しえたことを明示しており、また正道の宗匠としての意識の確立のきざしも認められるのである。また、「老のすさみ」における宗祇の解釈が、連歌の本意に深く思い入るところからその形象を眺望するという、適確な鑑賞眼によってなされているのは、実作者として「本覚真如の道理」に帰結する精神修養の道を稽古に進んだことにもよろうし、したがって詩心、詩的精神を根幹とした宗祇の連歌観からも当然考えられることである。宗祇の解釈方法が豊かな情感によって連歌の心の世界に深く思い入ろうとしたものであることは、やはり今日一般に言及されていることである。それで、かかる宗祇の鑑賞的な態度を、宗祇の作品注釈批評をとおしてより具体的に反芻しながら、宗祇自身の連歌観を振りかえってみようと思うのが、この小文の意図するところである。特に「老のすさみ」の付合の鑑賞において頻出する評語を取り上げ、その評語の共通的な性質

と個々の具体的な内容とを探索し、宗祇が庶幾した連歌美の一つのめあてを求めてみたいと思う。宗祇の連歌観の研究については、すでにすぐれたものが多い。したがって、今までの研究成果の域を出ることはないかも知れないけれども、この小文では特に「老のすさみ」の評語を中心に宗祇の連歌観を自分なりに考察してみたいと思うのである。

## 二

宗祇の付合についての考え方は、「吾妻問答」「長六文」など見ればその技術的な面や心構えが一応理解されると思う。ただ、連歌法式による個々の細密な付合（密合・取合）の問題は一応捨棄して、包括的な意味での付合についての宗祇の考えをすこし眺めておきたい。

宗祇の連歌史観のうかがえる文に、先人の連歌を批判した次のようなことばがある。

○中古は只前に心を付くる事おろかにして只寄合ばかりを心にかけて、一句に辛勞するなるべし。（吾妻問答）

○侍公失せて後、周阿一人が風を残して、天下是を便りとして学びけるに、侍公に心及ばずや有りけむ、一句をたしなむ心ばかりにて、毎々大様なる句侍るなるべし。（吾妻問答）

これは、連歌法式——その規則に拘泥し、密合はかりに苦勞して、宗祇の志向する重要な心づけを看過してしまっていることを批判したものである。また、やはり連歌芸術の根本的な性質である、前句への調和とその句境の変化②とを考慮せず、「一句をたしなむ心」——一句のみ巧妙に表現しようという気持ちにとられて、結局前句

への詩的調和を無視した「大様なる句」が多いことを批判している。「老のすさみ」にも「連歌の付やうおなじかるべし。前によく付て一句のさまざまかるべきを至極と申べし。若一句はよろしくとも、前につかざらんはいたづらごとなるべし」とあるように、一句詩的世界の形象として秀逸であると同時に、前句の心なり詞なりに緊密に付いて、そこに調和した総合美を形象するのが、最も至極なのである。いかに一句姿が独立句としては秀逸であろうとも、前句への調和が疎略であつたら、作品として全く芸術性がないのである。救済の、

まことに月のかけはあるかは

救済

猿さけふ岩はかくれの秋の水  
について、「前に付のみならず、一句更に凡慮をよびがたくや侍らん」と批評しているのも、連歌の根本的な原理を正確に把握しているところから生まれた言説であろう。

しかも、「老のすさみ」で注釈鑑賞している六十余句について、宗祇は「つく所の志の切なるをかき集侍れば」と述べているし、また他所に「是にてより所の切なることはみえ侍るべき也」という言葉も見えていることから、「志の切なる」付合により具象される調和美、そして正理に基づく普遍的な個性美を庶幾したことが想像されるのである。その付合の巧妙さによる秀逸なる連歌を宗祇は鑑賞的な態度で注釈しているのであるが、宗祇がより具体的にどのような連歌の具象の世界を庶幾しているかを、「老のすさみ」の評語を中心に考察してみたい。

まず「老のすさみ」における評語を無差別に摘出し、それをある観点を設定することによって分類してみることにした。分類する場合の観点については、まだ種々問題があるのだが、おまかに考えて、次のように五つの観点を設定してみた。

①宗祇が特に連歌の内容——連歌の心について批評しているもの。付合の価値評価の基準として、その連歌に表象された内実、詩心について批評したものである。

②「詞づかひ」などの表現面について批評したもの。

③連歌の句柄について批評したもの。句柄は「句のすがた」であり、風姿という言葉によっても表わされるように「すがた」に象徴される美的形象の世界を意味している。

④特に寄合・取合の巧妙さについて包括的に批評したもの。

⑤連歌作者の実作者としての手腕、才能を一般的に批評したもの。

以上の五つの観点により分類した評語を、すべて次に列挙してみよう。ただ評語を抽出する場合、評語そのものの性質をどのように考えるか問題があるが、厳密には考えず、できるだけ全部を列挙してみた。

①の観点によるもの

- 哀深くや
- あはれにや
- あはれにや
- あはれなるさまなり
- あはれ深きにや
- あはれ

- △ 感ふかく
- △ 思入たる
- △ 心を入れて付
- △ 心あるさまにや
- △ 其心深きにや
- △ 心深くて
- △ 入所の妙なる

△ (おもてにやすらかなるやうにて、甚深のことはりおほき)

◎ 其理面白き

◎ 其理おもしろくて

◎ 有心(ニケ所出ている)

□ たぐひなくや

□ 比類なくや

□ あたらしき

□ 珍くや

□ 心ことの外まさりて

□ 心のすぢめ

△注▽①の観点により分類した評語の中でも評語の傾向の相違し

たものがあるので、それもおまかに分類しておいた。

②の観点によるもの

- 詞づかひ常のことにあらず
- 詞をつかふ事肝心なり
- 詞づかひ及べき所にあらず

△注▽詞づけについての個々の具体的な批評は多い。

③の観点によるもの

- 其さま面白く
  - 面白く侍るにや
  - (詞も出合て) 面白く侍る
  - 上手のやす〜としたる
  - やすき(句)
  - おもてにやすらかなるやうにて
  - 句のさま珍重
  - ころとくして一興の風骨
  - えん
  - すがたをよくおもふべき
- ④の観点によるもの
- 取合珍重
  - 取合おもしろくや
  - 付やう一句上手の物
  - 付やう又拔辭
  - 付る所又甚深
  - よりやうめづらしく
  - すがたを本として付
  - 面白くや
- ⑤の観点によるもの
- ぬしの粉骨(二ヶ所に出ている)
  - 上手の作意
  - 上手の粉骨
  - 上手の物
  - 尤粉骨

これらの分類は、緻密な尺度で分けたものでなく、特に「詞づかひ」についての観点や句柄についての観点など形象の問題としてみた場合、異質の問題として取り扱うことは危険である。しかも、「詞づかひ」に関する評語は、非常に一般的な言説であつて、そこに直接理念的なものを求めることはできない。宗祇の「詞づかひ」についての考え方、態度の一つの漠然とした傾向を見るしかないのである。また、宗祇の連歌論書の中に見える、宗祇の庶幾する美的理念、つまり「たけ高し」「幽玄」「有心」「やさし」「えん」などの言葉はほとんど見られず、これらの美的理念の本質について明確にすることは不可能であるので、(勿論宗祇自身も明確にこれらの理念については提言していない)その具象的な世界を個々の作品を通して考察することによって、まず①の観点についてその内実を分析していつてみたいと思ふ。

#### 四

宗祇が連歌の付合において心づけを重視したことは、「老のすきみ」の次の文でも明確である。(たゞし、いかなる付合にも意味合いの連繫はあるものだが、そのなかで宗祇が「心」で付けることを重視したわけである)

○されば、基俊悦目、入雲御抄、京極黄門抄どもにも、歌の心詞は鳥のつばさのごとく、あひかけて叶まじきよし侍る也。心詞かなはずば、先心を本とせよと侍るにや。連歌の付やうおなじかるべし。前によく付て一句のさましかるべきを、至極と申べし、若一句はよろしくとも、前につかざらんはいたづらごととなるべし。是則心を本とすべきの儀なり。

問題は「心」についての宗祇の考えであるが「心誹語になく」「心をなく」「心たゞしく」「心のすぢめ肝用」「心も深く」などの言葉の如く、偏奇でない正理に基づく正直で普遍的な精神や深遠な詩心とよって象徴されるものであろう。「老のすさみ」の評語の分類の①では、連歌の価値基準として、特に「あはれ深く」「心を入れたる——思入たる——心深く」「有心」などの評語で表現している。五つの観点による評語で表現している。五つの観点による評語が非常に多く、いかに宗祇が連歌芸術において詩心、詩的精神を重視していたか想像されるわけである。もちろんこれから早急に結論を引き出すわけではない。

宗祇は「あはれ」深いという言葉をも、救済・心敬・智蘊・能阿・宗砌の五人の先人の付句の批評に使用している。では、宗祇が「あはれ」深いと批評した連歌の世界とは、どのように具象化された詩的世界であらうか。

- ④ 月さむしとふらひ来ます人も哉  
野寺のかねのとをき秋の夜  
救済
- ⑤ 我故郷と鳥そさえつる  
誰植し木末の野へにかすむなん  
心敬
- ⑥ あはれにも真柴おり焼夕けふり  
戻する市のかへるさまのやま  
心敬
- ⑦ ひとりのみおきある床に月をみて  
よそのきぬたにさむき衣手  
智蘊
- ⑧ おもふもとをしあと故郷  
旅まくら草の浪とにへたて来て  
能阿

⑨ 袖さへぬるゝみちしはの露

いにしへの宮の内野のはらをみて

宗砌

④について、宗祇は「心ははるかなる野寺のかねの物さびしき秋の夜、月は冷しくさよふけたらんころ、とふらひきぬる人もがなと思ふ心、哀深くや」と述べている。月が冷たく牙え、野寺の鐘の音が寂漠と余韻を響かせている秋の深更、人を求める情（こころ）の寂しき、そこに連歌的形象をなしたものである。その詩情は、秋夜野寺の鐘の余韻の寂しい風情を添えることによりいっそう深遠なものとなり、その寂漠たる余情の深さ、心の深さを宗祇は「あはれ」深いと評しているのであろう。

⑧については、「其さま面白く又あはれにや」と評し、「其世のひとのおもかげもなくて、とりのみ馴し木末にやどるをみて、我故郷と鳥ぞさえつると心を入れて付侍り」と述べている。木々が野辺に茫漠と霞み、「ひとのおもかげ」も無い荒れた故郷に小鳥ばかりさえずっている、その寂しさを深く心にかみしめて、つまり「心を入れて」付けたわけである。故郷の荒廃と野辺に霞む木末や小鳥のさえずりという自然と深く心を入れて、そこに深い詩的世界を創造している。その詩的世界の形象の姿を「面白く」と評し、その内にこもる情調、寂しい深い詩心を「あはれ」と評したのである。⑨については、「一句すこしつねのものながら、かはりて、佗人のすみ家などのさまあらはれてあはれにや侍らん」と評し、一句少し普通のものでありながら、佗人の寂漠たる心情や佗しいすまいのさまに心を密せて付けたことを示している。その連歌の寂漠たる風情は④の場合に近い。⑨では「詞づけ」や「嫌事」についても述べているが、「しかるを浪をしき草を結びつゝ夜をかさねて、所々うつり行

さま、あはれ深きにや」のように、はるか旅を続けながら、離れ来た故郷をいよいよ思う心情を「あはれ深きにや」と評している。その心情のこもる風情には、やはり今まで見てきた世界と同じく深い寂しさを挿曳させている。㊦は、その詩情において㊥と共通したものがあつた。「さしもの宮禁の跡そのなごりもなく、道の芝生のみしげりたるをみん心。まことに袖もうるほふべきことはり也」と宗祇は批評しているが、前句の袖が濡れるほどの道芝の露けさという情景に対して、その「みちしは」を「いにしへの宮の内野のはら」とすることに、前句の「袖さへぬるゝ」が懐旧の情となつて、深い詩心をこめた句の世界が創造されるのである。やはり、宗祇が「あはれ」と批評したように、懐旧の情にしろもの寂しさにしろ深遠な心に思い入つて句を創造しているところに付合の評価をしていると考へてもよからう。(㊥は、前句の単なる美的情趣の世界を、付句によつてより人間的な心情の深い世界に詩的展開を見せている。)

以上の付合についての批評を整理してみると、宗祇が「あはれ」深いと批評しているのは、深遠な詩的精神が内にこもつてゐる付合についてであり、それが「やさしい風情」である美的情趣の世界として形象されてゐるものについてである。具体的に言えば、㊥㊦の付合における寂寥たる心情の深さについての共感であり、㊥㊦における懐旧の情の深さ、寂しい悲しい心情の深さについての共感である。このような深遠な心情——詩心こそ文学的真実を求めると宗祇の庶幾するものであり、ここにまた普遍的な個性の発見があると思はれる。「心」の世界は宗祇自身「心詳諸になく」と言い、「心いやしき」を嫌い、「心きたなき事をせじ」と言つてゐるように、珍奇

を求めたり、常套に墮したりしないで、あくまで位高い「歌の心」でなければならぬのである。

なお、「あはれ」深いという評語に対して 漠然とした「心を入れたる——思入たる——心深き」という評語や「有心」という評語について、今迄考察してきたことと関連してゐるのであるが、ひとりと分析してみたいと思ふ。

㊦ かりになれこしおもかけそうき

世の中を秋の野山のおくの庵

㊥ 山かけも心にあさく身を捨て

おもへはうきよいかて住けん

㊥ 故郷は野にふく風のやとりにて

旅ねの夢はやすくさめけり

㊥ 君かあたりはかすますもかな

月もうししのひ通ひの夜はの空

㊥については、宗祇は「……おも影ぞうきとは、すてゝのちも秋の野山のおくなれば、ものさびしき此、うき世のおもかけの残ぬるをいとふ所、心あるさまにや。一句又感ふかく侍る也」と述べてゐる。奥山の庵に隠棲しながらも、その憂さ、寂しさのために、仮の世の面影を一方では嫌悪し、一方では忘れ去ることができない。その心のやさしく錯綜した風情を、「心あるさまにや」と批評したのであろう。㊥については、「心は、山のかげをさへ猶浅くおもふばかりに、身を捨ていとふかうおらひ入、我心にて思へば、うき世にいかですみけん」と、猶こしかたをかへりみ思ふ心也」と注釈して、「一句も心深くて、付る所又甚深也」と批評してゐる。宗祇は恋述懐の句について、「長六文」で次のように述べてゐる。

智淵

行助

宗砌

宗砌

○恋迷懷等の句(は只)何の符合も入べからず候、いづれの歌も無益候、只心をよく取り入て前句にひしと付候へば無上の事候。

この㊸も迷懷の句であり、その意味で「こしかたをかへりみ思ふ心」即ち迷懷の心として深く取り入って付けたものである。㊹についても、それ／＼求める心は違ふけれども、その詩心の深さは同じである。特に㊺では、「さらに平人の思ふ所にあらず」と言い、「一句はこの外やすき句なれども、入所の妙なるにより珍重に聞ゆる也」と批評している。形象面では淡々とした「やすき句」であるが、しかし「入所の妙」即ち心の深さがあるという点を珍重したのである。「平人の思ふ所」でない世界を創造する深遠な詩的精神によってこそ、秀逸なる連歌が生まれるわけである。これはまた当然なことではあるけれども、宗祇がその根本についてよく理解していたこと、その正理に基づいて実作なり鑑賞なりしていることは重視しなければならぬ。これらの批評に一応宗祇の連歌観のある傾向が察知できると思う。

## 五

今まで述べてきたことと同じく深い関係のある「有心」について少しふれてみたい。宗祇は「老のすさみ」で二回ほど直接「有心」という言葉を用いている。その作品は次のとおりである。

㊸ なれにし人も夢の世の中

山さくらけふの青葉をひとりみて

㊹ おもはぬいろをこゝろにそみる

夕まくれ友のまれなる花にきて

能阿

専順

㊸については、「きのふまではさしもさかりなりし花の行衛なく散はて、山深き木末の青葉計をうち詠めるたる時、はなになれきたりし人も夢の世中ぞと観じたる心也」と述べている。これは、宗祇の連歌の世界観の背景をなしている「吾妻問答」の飛花落葉の観想が具象的によく現われた句ではないかと思う。すでに散りはてて青葉ばかりの山桜を、ただ一人茫然と眺める。花に親しんだ人もすでにいない。その夢のようなはかなさと寂しさとが深い余情の世界たらしめている。その余情、観想の深遠さを宗祇は「心あくまで有心」と評したのである。㊹の句は、別に「長六文」に「有心体の句」として掲げてある。風体の一つで、しかも最高の風体としての「有心体」の中に、㊸の句を例示していることから、宗祇の庶幾した「有心」を考察する場合に参考になると思う。宗祇の注釈によると、静かな夕暮れ、さすがに花見客も帰りはてて花の色もなせか、身にしみてあわれを感じさせる時、風聞せわしく花を見て帰った人々はさては花を思ふ心の色はなかつたのかと心に思うというのである。一人夕暮れ時に桜花を眺めていると、花の色も身にしみて「ものあわれ」を感じさせる。その夕暮れの桜花の風情、「あわれ」のたゆたう余情、そしてせわしく帰って行った人の心への思い寄せなど、その美的形象の世界はやさしい風情、深い余情、深い詩心によってまず達成されているのである。したがって、詩心の深さ、余情や面影の漂う姿(当然「えん」なる詞、やさしい美しい詞の具現を俾う)こそその本質的なものとして考えてしかるべきであろう。

なお、「長六文」には「有心体の句」として同じく「老のすさみ」で注釈している次の句を例示している。

かなしやこひし夢にたにみす

旅は秋古里いかにあれぬらん

宗硯

この付合について宗硯は「大かたの旅もかなしきに、しかも秋の空にとりあつめ、心づくしなるうへに故郷いかにあれぬらんとおもふに、夢にだにみざらん事、かなしくも恋しくも侍るべき也」と注し、情感的な鑑賞眼でこの連歌の心を把握している。特にこの句は面やすらからで宗硯らしく「幽玄を先として句がら大に長高くなす」(古今選談集)にふさわしい句の姿を形象化している。宗硯がこれを「有心体」としたのは、句の姿としては「長高」でありながら、やはり旅の情、私情などを余情として漂わせ、故郷への「かなしやこひし」という心情をいっそう深いものにさせているというところに視点を置いてのことであろう。

以上三つの付合の具象化された世界の探索をとおして有心の内的要素を見てきたわけであるが、しかしこれだけのことでは有心の美的理念としての内実を規定することはできない。もとく今迄の研究によっても「有心」の概念についての決定的なものはない。たゞ、「有心体の句」のもつ美的形象には一般的な傾向として深い余情の世界の包攝のもとに深い詩心が内蔵されていると説明することは可能であろう。特に宗硯が「長六文」において「幽玄にたけたかく候などと申句」として例示している句と比較してみても、有心体の句がより深い人間的な心情の揺曳を詠出したものが多い。つまり、美的情趣に包摂された世界でありながら、より人間的な心情、すなわち寂しさ悲しさつらさに深く思いをこめ、それが美しい詞によって形象化されたものが、「長高くやさしい風情・風姿」となっている句に、「有心」の美的様式の本質を考察することも可能と思う。このように「有心」の概念を考えると、四において具体的に

に考察した「あはれ」深い詩的世界、そして「心を入れたる——思入たる——心深き」詩的世界の形象も、必然的に「有心」体の句として評価することもできると思われる。「有心」は美的理念であり、美的様式であるけれども、その根底にはこれらの心的世界が内包されているのである。

宗硯が「心・風情を専らとして、有心なる所にもつぎ、姿美しく長高体を恋ひねがふべく候也」(吾妻問答)と述べているように心・風情を深く思索し、あくまで「有心」に基づくということの重要さを提言していることから、具体的に考察してきた詩心の深さ、余情の深さというものがいかに根幹をなしているか理解できるわけである。たゞそれが姿美しく長高体をなしているのが至極なのである。

## 六

今迄評語の①の観点によるものについて考察してきたのであるが、これらは当然②の観点による「詞」の問題、③の観点による「句がら(句の姿)」の問題と緊密な関係がある。したがって、一応②③の観点によるものについてその概観を眺望してみたいと思う。②の評語については厳密には評語と言うべきではないかもしれない。宗硯が淡然とではあるが特に「詞づかひ」にも視点を置いて評しているわけである。それを次に例示する。

④ なれにし人も夢の世の中

山さくらけふの青葉をひとりみて

⑤ むかしの夢のおも影もうし

能阿



あしたには雲ある山の旅まくら

宗砌

◎ 太刀さげはきて休む旅人

ふるさとの夢やつかのまゝ一ねふり

専順

④については「有心」の考察のところでも例示した句である。「心あくまで有心にしかも詞づかひ常のことにあらず」と宗祇は評している。この句の詩的世界についてはすでに分析したが、「心あくまで有心」ということと美的形象面の「詞づかひ常にあらず」という「心」と「詞」の完全な調和があつてこそ、念願すべき句が生まれるのである。④では、「あしたには」という詞が「たゞなる句ならばあしかるべし」と述べ、しかし「故事をおもふ故に」さしつかえないと言うのである。そして、「歌道は只詞をつかふ事肝心なり」と附加している。④においても付合の巧妙さを賞美し、「詞づかひ及びべき所にあらず」と述べ、「詞づかひ」の重要性を強調している。宗祇が心を重視しながらも、「詞づかひ」にも厳しかったことが想像できる。「老のすさみ」では詞づけについて具体的に注釈批評しているが、宗祇が「有心」の達成を連歌制作の基盤とする反面、詞づけについての技術的な面をも決して捨棄していなかったことも忘れてはならない。

次に③の観点であるが「句の姿」は当然①の句の心と②の詞との美的調和に達成されるものである。その句の姿について宗祇は「姿美しく長高体を恋ひねがふ」「句の姿をなだらかに思ひはかるべし」「吾妻問答」のように述べている。しかも「長高く幽玄有心なる姿」(吾妻問答)という表現もあり、これが包括的な意味で宗祇の連歌における理想であつたと思われる。「老のすさみ」の「其さま面白く、句のさま珍重」とある「さま(様)」も、吾妻問答の「句

の様も長高く有心にして」のように、句の姿と考えてよからう。「面白く」という評語は、別に理念的な内容として使用しているのではなく、たゞ秀逸であることを評価したものであろう。(たゞし、①の観点のところで専順の付合に限って「其理面白く」という評語を二度も使用しているのは、付合によって思想上のあたらしき珍しさや、あたらしい美的情趣——風情の世界を創造していることに對する評語であらうか)

また、「上手のやすく」としたる句「やすき句」「おもてにやすらかなるやうにて」などの評語があるが、これは「句の姿をなだらかに思ひはかるべし」の提言と共通したものである。

④ みねこすかせに木葉ちるをと

専順

⑤ 故郷は野にふく風のやとりにて

宗砌

⑥ たれにちきりをむすふともなし

宗砌

里の名もしらぬ野中の草まくら  
この④⑤⑥とも共通していることは、④おもてにやすらかなるやうにして、甚深のことはりおほきなり、⑤一句はことの外やすき句なれども、入所の妙なるにより珍重、⑥作者の心之辛勞したる句、くれんぐも上手のやすくとしたる句、のように形象化された姿としては「やすらか・やすき」平淡な句でありながら、同時に深遠な心の世界を内包しているというのである。これは、専順・宗砌の一つの特徴だと思つが、また宗祇の所幾した句の姿もここにあつたとも考えられる。

しかし、句の姿を理念的にはどのようなものを庶幾していたかを

跳望しなければならぬ。一句ではあるが「えん」という評語を使用している句がある。

すだれのうちの衣の音なひ  
軒ちかき花の匂ひに月更て

智蘊

宗祇はこれについて「軒ちかき月に花うちかほりたらん折ふし、みすのうちの音なひ、まことにさぞと覚え」と注釈し、美しいやさしい風情、「えん」の世界を的確に把握している。なお、「長六文」に「幽玄にたけたかく候など、申句」として次の句が例示してある。

④ まささちりくる峯のあき風

小鹿なく外山のおくや時雨らん

専順

⑤ 夢うつともわかぬあけぼの

月にちる花はこの世の物ならで

心敬

これは「老のすさみ」に例示してあるもので「幽玄にたけたかく」とあるけれども、美的情趣の世界としてはいかにも優美で「えん」なる風情を漂わしている。「幽玄にたけたかき」美的世界も、結局は和歌的優美、やさしき風情、えんなる風情を言ったものである。

特に「長高」は吾妻問答に「こまやかなる事を先として、長高き所少なく」「いかにも心を高くもちて、細かに入り候はで」とあるように、心の位高く句柄を大きくすれば達成されるものであろう。そして、「長高」の句の姿は、終局的には「やす〜とした」平淡な風姿として考えてもよいのではないかと思う。しかも、宗祇が「姿美しく」としているその内実こそは、和歌の伝統を継承した幽玄美、和歌的優美、もっと言えば「やさしき風情」「えんなる風情」の美的形象の姿である。

以上は「老のすさみ」における「詞づかひ」の批評についての問

題に簡単にふれ、③の観点による「句の姿」として「やす〜」としたる「句の姿」、「幽玄にたけたかき」風情・風姿の世界について考察したものである。前述したことであるが、宗祇が庶幾した連歌の世界は究極には「長高く幽玄有心なる姿」にあると考えられるので、その意味で今迄「老のすさみ」の評語をとおして分析してきたことで、ある程度その概観を眺望したことになる。なお、④の観点による「密合・取合」についての秀逸を評したもの、⑤の観点による実作者の手腕・才能を賞賛したものがあがるが、これらについては特に問題として揭示しなかった。たゞ、「密合・取合」における技術的な面での実作指導もしていることは忘れてならないと思う。

△注V 「老のすさみ」本文は、類従本による。

①俳諧大辞典年表

②「宗祇」荒木良雄著 創元社

(広島県立呉三津田高等学校教諭)